

切なき思ひぞ知る 室生犀星

我は張り詰めたる氷を愛す

かかる切なき思ひを愛す

我はその虹のごとく輝けるを見たり

かかる花にあらざりて花を愛す

我は氷の舞にあつものに同感す

その創のごときものの中にあつて感情を感す

我はつねに狭小なる人生に在り

その人生の荒涼の中に呻吟せり

さればこそ張り詰めたる氷を愛す

かかる切なき思ひを愛す



演出の言葉……

東口次登

今回の企画をみて、子ども達がほんとに普通に生きる事が難しい世の中だと感じた。学校でのストレスを家で癒して貰うはずが、家で倍返しに遭う(勿論その反対も)。いつか行き場がなくなり、ひとり自分の世界に居ることがギリギリ安心の場となり、そして『生きてる意味ってなんだろう?』と疑問を持ち続ける…。

人間で演じると目を背けたくなる、生々しい現実の再生ドラマになりそうですが、人形劇だとファンタジーになります。李緒の心の声は、実は観る人それぞれの自分の心の声だと気付くはず。そして李緒が求めているのは自分が求めているものだ…それは信じてくれる人がいることかな、と思いつつながら作品をつくりました。

人形劇団 **カラルテ**

企画・鹿児島県高学年祭典プロジェクトチーム

原案・児玉茉莉亜(鹿児島市北部みどり子ども劇場)

脚本・宮本敦

演出・東口次登

美術・永島梨枝子

音楽・ノ瀬季生

切なき思ひぞ知る

李緒は中学3年生。本を読んだり空想するのが好きな女の子。学校での話題やノリについていけず孤立気味。家では親に勉強の事で叱られ、優等生の兄とも比べられ、李緒の心のモヤモヤは晴れない。本音を話せるのはぬいぐるみのパンダだけ。

そんなある日、突如李緒への陰湿ないじめが始まる。何も言い返せない苦しさや情けなさが重なって、李緒は声が出なくなってしまう。部屋に閉じこもり自己嫌悪と闘う李緒。思いがけない両親の行動によって心を開き始め、兄との筆談で一步を踏み出し、ずっと気になっていた室生犀星の詩集『切なき思ひぞ知る』を手にして…。

改めて、周りに流されず自分自身の言葉で話して行こうと心に決め、学校に向かう。変わらぬいじめに対し、李緒が声を上げた。すると、それまでは無関心に見えていた一人のクラスメートが…。



この作品は…

鹿児島の中高生らとチームを作り、そこから生まれた原案をもとに創りました。途中の試演会を観に来た中高生の意見でガラッと作品が変わりました。鹿児島県内23ステージを終えて感じたのは、決して中高生だけのテーマでは無かったということ。母たちが自身の10代に立ち戻って観ているようです。勿論、親の立場でも。



〒559-0015 大阪市住之江区南加賀屋3-1-7
☎06-6685-5601 FAX 06-6686-3461 AM10:00~PM5:30 (日・祝休み)

<http://www.clarte-net.co.jp>
E-mail:office@clarte-net.co.jp